

心に残るたから物

卒業を前にした友子のクラスでは、この一年間の心に残る思い出を一人一人発表することになった。

クラスみんなは、六年生のアルバムを見ながら、どんな思い出を語ろうかといういろいろ考えていた。友子も修学旅行しゅうがくりょのことにしようか学習発表会のことにしようか、それとも運動会うんどうかいのことに・・・と、悩んでいた。



アルバムの一枚一枚には楽しい思い出がいっぱいつまっていた。アルバムをめくったとき、三年生のたまみちゃんからもらった手紙を見つけた。友子の学校では、一・四年生、二・五年生、三・六年生がいっしょになっていろいろな活動をしている。本当のことをいうと、三年生は言うことをきかないし、ふざけてばかりで友子はいっしょに活動するのがいやだった。

そうじのときなど三年生といっしょだと、机は重いからといって運ぼうとしないし、

「床ゆかをはいて」

と言ってもすみの方まではけていなくて、いつも後からまたやらなくちゃいけなかった。

担当の先生からは、いつも

「まだ、そうじ終わっていないの。さっさとしないと時間ないわよ。」

と、注意を受けてばかりだった。これが、同じクラスの人とやっているのならとつくに終わっているのにといいいな思いをしていた。

そんないやな思いばかりをしていたところ、三年生のたまみ

ちゃんから一通の手紙をもらった。



友子お姉ちゃんへ

お姉ちゃん、いろいろなことを教えてくれてありがとうございます。わたしはお姉ちゃんとペアになれてうれしいです。

なわとびの練習をしているとき、わたしが二重とびを教えると言うと、二重とびができるようになるには、手首をはやくまわす練習をするといよいよ言ってくれたり、手作りのなわとび学習カードを作ってくれたりしました。だから、お姉ちゃんのおかげで二重とびが十回とべるようになりました。お姉ちゃんありがとう。

この間のそうじのとき、お姉ちゃんが机を運んでねと言ったのに、わたしは重いからいやと言ってやりませんでした。その後すぐ先生が来てお姉ちゃんは先生にしがられてしまいました。ホトウは、わたしが悪かったのに。ごめんなさい。

わたしも六年生になったら、お姉ちゃんのような上級生になりたいと思います。卒業しても、わたしのことをわすれないでください。わたしもお姉ちゃんのことをわすれません。

たまみより

わたしは、いつの間にか最上級生としての自分の行動をふり返っていた。そんな思い出をみんなの前で語りたかった。わたしは、たまみちゃんからの手紙を通して、最上級生として学んだことや実行したことを発表することにした。そして、卒業までの残り少ない日々によりよい思い出づくりをするために何ができるか考えていこうと思った。

